

実写映画「夜は短し歩けよ乙女」 (原作 森見登美彦)
プロット 20130714 版 改
大岡俊彦

碁盤の目なのに、我々は恋の迷路にいる。

京都学生街を舞台とした、運命の再会に至るまでの摩訶不思議なラブコメディ。

主な登場人物

- 狭間有一 (三回生) モテナイ男。理屈ばかりで「人生の一冊」を探して本に逃げる。
黒木ちひろ (一回生) 好奇心の塊で、「オモチロイ」事を探している。
- 羽貫 (27) 大酒のみで豪快な巨乳。
樋口 (八回生) 自称天狗。羽貫の連れ。大学の古株で、有一のサークルの先輩。
菰沢 (三回生) 有一の親友で相談役。学園祭事務局長。
パンツ総番長 (七回生) 役者、劇作家。有一のモテナイ友。ムサイ男。
- 須田紀子 (二回生) パンツ総番長の思い人。
少年 (10) 謎の少年。「古本市の神」を名乗る。
東堂 (50) 鯉センター経営。春画コレクション多数。
李白 (70) 昼は高利貸し、夜は遊び人。

構成改変の基本方針

- ① 春夏秋冬の冬を削り、秋の学園祭をクライマックスにする。
絵が大きくなって盛り上がり、「青春とは祭りそのものである」という中心テーマが立ちやすい。
- ② なぜ主人公（有一と命名）は、ヒロインの乙女（ちひろと命名）を好きになったのか？
なぜヒロインは主人公を好きになったのか？
を明確に描き、青春の狂騒曲の中にも、ラブストーリーの軸を作る。
- ③ 「夜は短し歩けよ乙女」のタイトルを、春編だけにかけて、きちんとラストで回収する：
デートの約束をした夜、二人は眠れずに、思わず夜うろうろと外を歩く。これまで偶然出会った場所などをめぐり思い出にひたるが、出会えないまま朝に。同じ朝日を偶然見たこと、これこそが運命なのだ、という落とし方にしたい。
- ④ 李白電車（三階建て叡山電鉄）は、予算の都合でカット。春編のクライマックス（飲み比べ）もやめて、クライマックスは学園祭に集約していく。

プロローグ：

春。京都は桜満開。吉田神社のたもと、京大の時計台前は、大量の新生生と、それ以上に大量ののサークル勧誘組でごったがえしている。飛び交うビラと看板の数々。

「京都を歩く会」というどうでもいいサークルの先輩、八回生の樋口に「借りてた本を返す」と呼びだされた有一（三回生）。「こんなキャピキャピした場に呼び出すな！ 私は今日も人生の真実を探し出すために、本の宇宙に漕ぎ出せねばならんのに！」と、小説『赤い帝都』を受け取る。サークルの二回生に勧誘手伝ってと頼まれるが、もう幽霊部員だから、と帰ろうとする。と、新生生女子とぶつかりかける。右によける。左によける。右によける。全部タイミングが合ってしまう。可憐な彼女に、ひとめぼれする有一。

桜の花びらが一枚ひらひらと、有一の本に落ちる。彼女が本に気づき、「こんなレア本を持っている先輩がいるなんて！ 私、同じサークルの、黒木ちひろと申します！」と挨拶。「あかいていと」の一文字「て」が花びらで隠れ、「あかいいと」になっていることに驚く有一。

有一 NA「俺は運命など信じない。運命など、科学的でもないし論理的でもない。だが、カオス理論を少しでもかじれば、花びら一枚の行方すら理論的予測が出来ないことは明らかだ。ガウスにもオイラーにもアインシュタインにもだ。無限の地面の中からたった一枚の花びらが我が本の面積に落ちる確率、それを彼女も持っていた確率、一文字が隠れ奇跡的な言葉になる確率、彼女が美しい確率、そして、そんな女子に俺が話しかけられる確率！ 私は運命など信じない。信じるてたまるか。だがこれは、運命の出会いに違いない。私は一方的に確信したのだ」

一幕：

有一 NA「京都は恋する町である。桜に葵に祇園祭、大文字に紅葉節分祭、春夏秋冬神社仏閣八百万、無限なる素敵イベントてんこ盛りだ。ただしそれはカップルに限定である」汚い四畳半の自室で本を読み続ける有一。「逆に、我々には特権がある。本を読みうる莫大な暇を持つということだ。真の知識を得、人生とは何かを知り、天下国家を憂うのだ」突然下宿の壁がめりめりと倒れ、カップルたちが楽しそうにその前を過ぎていく（イメージ）。「彼らと私は、数学的にねじれの位置にいる」

有一の過去。「全京都モテナイ連合」の代表となり、モテナイ男たちとともにカップルに嫌がらせ。「鴨川オセロ」（土手に等間隔に座るので有名な鴨川カップル。あるカップルを

モテナイ男で挟み、カップルがいなくなったらそこにモテナイ男を入れてオセロ勝利)で美酒に酔う。鴨川デルタでは「花火ニアピン」(物理学科が弾道計算し、ぎりぎりにロケット花火を着弾させてびっくりさせる)の成功。京大カップルの聖地、喫茶「進々堂」を目指し、オセロを達成するため行進する有一達。だが、三条、御池、丸太町、近衛、一条、今出川と北上するにつれ、モテナイ連合は一人また一人とぬけていく。たった一人で進々堂にたどりついた有一は、店内に、かつての仲間がカップルとして座っている楽しそうな姿を目撃する。「このたった一枚のガラスが、私と彼らをねじれの位置にほうりこむ」

そんなある日、樋口先輩から電話があり、本を返すと言われた。そして、彼女——ちひろに出会ったのだ。

その「運命の出会い」を、四畳半で春の鍋をつつきながら、親友の葦沢に語る有一。「運命の出会いを果たした我々が結ばれるには、運命の再会をするしかない」と自論を展開。「たとえば、夜のちまたで酔った変態に襲われているところを、マントを翻し颯爽と救いに現れる」「たとえば、本屋にて同じ本に手を出し手が触れあう」など。「陳腐」と彼女持ちの葦沢は言う。「お前だけは最後までモテナイ連合にいたと思ったのに」と有一は裏切られた気持ちである。「これだけ本を読んでも、男女というものがわからん、どうすればいい」有一は男女の秘密を一撃で解決することを求めているが、葦沢はそういうことじゃない、と噛み合わない。そうこうするうちに、彼女も参加する新歓コンパ日がやってきた。運命の赤い糸を探すための「運命の再会」は、金曜の夜だ。

しかし飲み会では数々の男がちひろに群がり、有一は一言もしゃべれなかった。

ちひろは持ちネタの「おともだちパンチ」(親指を中に握る、かわいい拳で打つパンチで、乙女の最終兵器。暴力の連鎖を生む拳とは違い、このかわいらしいパンチは、愛と友情と人類の進歩と調和を生むのだ)の話をするが、皆つまらなそう。二次会へ流れず、ちひろは一人北へ歩き出す。気づいた有一は、あとをひそかに追いかける。

四条木屋町を過ぎ、北へ。ここは迷路のような飲み屋街、木屋町先斗町。角をふいと曲がるちひろ。有一は見失う。と、後ろから謎の老人に声をかけられ、ズボンを剥ぎ取られパンツ一丁の姿に。「これでは俺が『夜の変態』ではないか!」

一方、ちひろはバーで一人酒を飲み、受けなかった話の一人反省会。そこへ怪しげな男、東堂(50)が声をかけてくる。「偽電気ブラン」というウマイ酒をおごる東堂。これは李白なる男がつくった密造酒で、これで大金持ちになったのだと。「何か悩んでいたように見えたが」「私はいつも人に最後まで話を聞いてもらえません。きっと私自身がつまらぬ人間なのです。私としゃべる位なら炊飯器と話すほうが興味深いのです」「小さいことで悩むな。今から面白い経験をすればよいのだ」と大人な答えをする東堂に感心するちひろ。

逆に、東堂の身の上話。彼は莫大な借金がある。鯉の養殖業だが、先日の竜巻で鯉がすべて空に飛んでいった。借金を大金持ちの李白にしたが、返せず、命より大事な（風呂敷包みの）この宝物を手放さねばならないのだと。人生がんばろう！お互いに！と言いながら、ちひろを抱きしめ、胸をもんでくる。困るちひろを、突如現れた大女、羽貫（27）が助ける。逃げ出す東堂。「京都の夜は魑魅魍魎ぞろいだぞ」と羽貫。「我々もその一人かも知れんぞ」連れの男は樋口。職業は自称天狗。「飲み足りないので、タダ酒の旅に連れていこう。面白いよ」と羽貫。「面白い」という言葉に、ちひろはついてゆく。

料亭の庭から、とあるサークルの宴会に潜入。羽貫が、酔った学生の肩を抱き乳をおしあて、仲良くなって席につきタダ酒をゲット。流れるような技に感心するちひろ。ここはどうやら、詭弁論部というへんてこな部の宴会である。学生たちは、詭弁討論中だ。

一方、逃げる東堂に出会う有一。パンツ一丁の有一を見て、「李白にやられたな！」と。李白は若者のズボンをはぎ、恥をかかせるのが趣味なのだ。昼間は高利貸し、夜は遊び人、と東堂は毒づく。この風呂敷をとりあえず巻け、と親切にしてくれる。風呂敷から出て来たものは、春画の数々。世界遺産を李白に売る前に、一杯ひっかけたい、つきあえと東堂。

詭弁論部の宴会は、名物「詭弁踊り」で納会。「ウナギのようにぬらぬらと、詭弁論者とおります」と踊りだす。盛り上がるの隙に脱走する樋口と羽貫。「なんと巧妙な！」

次のバーでは、樋口が天狗芸（宙に浮いたり口から鯉のぼりを出したり）を見せて、タダ酒を紳士たちにおごられる。テンションの上がったちひろは、先ほどの詭弁踊りを。と、紳士たちの中に同じ踊りをする赤川（55）が。なんと、詭弁論部の初代部長であった。バーの外に、詭弁踊りで練り歩く詭弁論部たち。「なんと奇遇な！」 詭弁踊りに加わった一行。樋口は天狗芸で盛り上げる。街の酔っ払い達も集まってきて、踊りながら練り歩くさまは、「小さな祇園祭」だ。

一方、バーで「どうして人生こうなった」となげく有一と東堂。「赤い糸は、切れたのか」と有一はヤケ酒。「閨房調査団」の千歳屋（60）がやってきて、春画を鑑定。だが、真っ赤な偽物だった。「もうおしまいだ！俺は破産だ！」と東堂は春画を破り捨て、窓から身投げをしようと。窓の下の騒ぎに気づく有一。詭弁踊りの一行だ。天から降ってきた春画に「京の雅」と盛り上がる一行。その中にちひろの姿を見つける。「赤い糸は、切れても結べばよい！」 店の中にあった小さなダルマを投げる有一。ダルマのささくれが有一の赤いセーターに引っかかって、糸がほぐれてゆく。ダルマが、赤い糸を連れてちひろの元へ飛んでゆく。

ちひろは地面に転がったダルマに気づき、赤い糸の先……東堂に気づく。「東堂さんでは

ないですか！」 「おう!？」と赤川社長。「兄さん」と東堂。なんと、生き別れの兄弟が、先斗町の果てで偶然再会したのだ。「今宵は、なんという奇縁でしょう！」とちひろのテンションが上がる。東堂は兄との再会を喜び、ちひろに抱きつき、キスをしようと迫る。「千載一遇のチャンス！ この変態めが！」と有一は割って入る。そこへ、東堂を狙ったちひろの「おともだちパンチ」が、有一に誤爆。

と、上空から、ぼたぼたと錦鯉が降って来る。俺の鯉だ！と東堂。なんて夜だ！ 鯉が竜になって帰ってきやがった！とはしゃぐ。その鯉が頭にあたり、有一は気絶。

二幕：

後日。有一は興奮気味に葦沢に報告するが、「それってただ殴られただけでは」とつつこまれる。有一は、改訂版の「運命の再会」作戦を語る。ありとあらゆる場所で、彼女の出没する時間にあわせて待ち伏せをし、偶然会った事を装う、それをくり返しているうちに彼女の中で俺の比重が大きくなり…という計画だ。「まずは外堀から埋めてゆく」という有一。迂遠すぎるわと葦沢。有一はこれを「ナカメ作戦」と名付ける。「ナ」るべく「カ」のじょの「メ」に止まる作戦だ。

カレー屋の前、中央食堂、銭湯、百万遍交差点、スーパー大黒屋。ありとあらゆる普通の場所で、偶然の再会を装う有一。最初こそ「先日はまちがってパンチを見舞ってしまい、大変申し訳ありませんでした」と謝られるものの、次第にただ挨拶をかわすだけの日々となる。そしてある日突然、彼女は「偶然の場所」に現れなくなっていまい、途方に暮れる。

ちひろは、夜のバーでバーテンのバイトをはじめていた。あの夜最初に入ったバー「月面歩行」。ここから始まった「オモチロさ」が忘れられないのだ。樋口と羽貫がふらりと現れ、再会に盛り上がる。

梅雨の日も、夏になっても待ち続ける有一。百万遍交差点（京大西北部の、演劇の立て看板の聖地）で待っていると、路上演劇をはじめようとするムサイ男が。その男は「パンツ総番長」と名乗り、一人芝居「偏屈王」をはじめ。 「牢獄に閉じ込められた偏屈王が、憧れの人プリンセスダルマとの再会を願い、泣き叫ぶ」一幕である。不覚にも感動した有一。パンツ総番長には再会したい女性がいて、彼女がこの芝居の評判を聞けば俺だと分かるから、と彼は芝居の動機を語る。

——二人の出会い、去年の学園祭。突然リンゴの雨が降ってきて、彼女と自分の頭で同時に跳ねた。思わず二人で笑い、それで恋に落ちたのだと。しかし会えたのはその時だ

けで、名前も何もわからないのだ。彼女の話したダルマの話題だけが記憶にある。だからヒロインは「プリンセスダルマ」。「偏屈王」は、最終幕で彼女と劇的な再会をとげる予定だ。すなわちそれはこの演劇が評判を呼び、彼女が俺だと気づくその日だと。

己と同じにおいを感じ、意気投合する有一。俺達がうまく行かないのは、俺達が「人生の一冊」を手に入れていないからではないか、と仮説を述べる。その本にさえ出会えば、男女の秘密が全てわかる、俺達の求める真の本である、と有一は力説する。来週の、京都最大の古本市「下鴨古本市」ならその本が入手できるのでは、とパンツ総番長。「そこで同じ本に手を出して手が触れあったり、とか」「そんな中学生みたいな妄想を」と二人は笑う。

真夏の下鴨神社。広大な境内には無数の古本テントが出店、さながら迷路のようである。古本市に来ると有一は気分が悪くなる。全ての本が「俺を読め」と言ってくる幻覚を見るからである。

一方ちひろも、この古本市に来ていた。ジェラルド・ダレル『鳥とけものと親類たち』を見つけ、「ビバ！ビギナーズブック」と小躍り。とある少年が、声をかける。「いい出会い、おめでとう」 彼には「人と本の縁（赤い糸）」が見えていて、それをうまくつなぐのが趣味なのだと言う。彼には、ちひろの「人生の本棚」が見えると言う。それは今まで読んできた本が全て入っている本棚だ。オスカー・ワイルド『ドリアン・グレイの肖像』、マーガレット・ミッチェル『風と共に去りぬ』、谷崎の『細雪』、円地文子『なまみこ物語』…見事に当てられる。「最初に読んだ本は、『ラ・タ・タ・タム』か。いい絵本だよ」 それを聞き、ちひろはその本を失くしてしまったことを告白する。あの本こそ、私の「面白きものを探す旅」のはじまりであったのに。あの本に、もう一度会いたい。

有一はちひろの後姿を見つけ、追おうとする。が、少年にぶつかり、彼のソフトクリームを落としてしまう。弁償することになる有一。「お兄ちゃん、あの女の人が好きだろ」と有一の意図を見抜く少年。「何故分かった」「目からビーム出してて、後頭部が焦げそうだった」「彼女の後姿の世界的権威になるほどに、彼女の後姿を俺は見続けているのだ」「それってストーカー…」「ガキは黙ってソフトクリームを食え！」

本の場所を変えたり、値札を変えたりする少年を見て有一は咎めるが、彼は「ここの店主は、正しい縁の糸を知らないからだ」と。子供のくせに生意気な、という有一の背後に、彼の「人生の本棚」を見る少年。しかも、その関係を「一本の赤い糸」にしてみせる。「シャーロック・ホームズの作者コナン・ドイルは『失われた世界』を書いたが、それはジュール・ヴェルヌのSFに影響を受けたからだ。そのヴェルヌが『アドリア海の復讐』を書いたのは、アレクサンドル・デュマを尊敬したから。デュマの『モンテ・クリスト伯』を

日本で翻案したのが『萬朝報』を主宰した黒岩涙香。その黒岩は…」 その博識ぶりに驚く有一。

しかし、本棚には『ラ・タ・タ・タム』が足りないねと。「?」「彼女が無くした本だと言ってたよ」「なにい!?! その本が手に入れられたら……」

しかし、一向に彼女の姿も絵本も、広大な古本市では見つからない。と、東堂に再会。李白の「売り立て会」の助っ人を10万で依頼される。変人李白の膨大なコレクションには、必ず自分の求める本があるという。東堂は春画の本物を探している。「10万あれば、古本を買うのは思いのままだ!」と有一は即決。

古本一の奥には、不気味な赤いテントがある。その中に、李白翁が。春に奪われたズボンに再会する有一。この会の参加者には自称天狗の樋口も混じっている。

テント内はストーブがたかれ、コタツの上には火鍋が。暑さに耐えて最後まで火鍋を食したものに褒美をやる、と変人李白翁が冷やし偽電気ブランを飲む。「若者の空回りこそ最高の肴」鍋を一口食べた有一は、あまりの辛さに帰る決意を。だが李白コレクションの中に『ラ・タ・タ・タム』が! しかも彼女の字で名前が。有一 NA「これがわが人生の一冊でなくて、なにが人生か。男女の真実を記した書など、どうせどこにもないのだ。あれこそが彼女のハートを射止め、薔薇色のキャンパスライフにつながる、わが人生の一冊だ! 諸君、異論があるか。あればことごとく却下だ!」

次々に辛すぎる鍋に脱落するなか、有一は最後まで鍋を食べ続け、樋口との一騎打ちに勝利。突然電気が落ちる。再び電気がつくと、棚の古本がすべて盗まれていた。「あるべき本を、あるべき場所に」とのメッセージが残される。「古本市の神」の仕業だ。一同は、古本市へ散る。

「あった!」 絵本コーナーに『ラ・タ・タ・タム』を見つける有一。そこへ同時にのばされる手。ちひろだ。「陳腐な運命の再会」のパターンだ。しかも全身汗でぬるぬる、辛さでやられた喉はひと言もしゃべれない。「ぬちゃ」と音を立てて彼女の手に触れてしまった。その気持ち悪さに、一瞬彼女は手をひっこめる。有一は、必死でジェスチャーでその本を譲り、逃げる。絵本を手に取り、驚くちひろ。それは自分の名前が入った、正真正銘自分の失くした絵本だった。

有一は、葦沢に愚痴りにいく。葦沢は今や学園祭の実行委員長に昇格し、学園祭の準備で忙しい。俺みたいな気持ち悪い男は、女性を好きになってはならない人種なのだ、と落ち込む有一。実は、怖いんだ、と有一は本音をもらす。「外堀を埋めたら、次は本丸に挑まなきゃならない。そのとき、何を話せばいいのだ? 本の話をして、彼女が俺に惚れるのか? 本に惚れても俺には惚れないだろう」「じゃああきらめるのか?」「より運命的に再

会するしかない。運命というロマンで、気持ち悪い俺がゲタをはかないと」

ナカメ作戦は、あさっての方向に暴走。大文字山を、「大スキ」文字山に変える事件、三条土下座像（御所に向かって土下座する偉人の銅像、待ち合わせのメッカ）の前に土下座される像となる事件…。何一つ彼女との「より劇的な、運命の再会」には繋がらず、有一はついに「彼女をあきらめる」ことを宣言する。「本を友とし、世界の真実を探し、天下国家を憂う人生に戻る。赤い糸なんて、そもそもなかったのだ」と引きこもる。

一方、肌身離さず持ち歩き、バーでも眺める『ラ・タ・タ・タム』を見て、樋口が、それは有一が異常なる活躍で取り戻したものだ、と真実を話す。この天狗が勝負に負けるほどだと。あんな全身汗まみれになって、何が彼をそこまで駆り立てたのかと。「狭間先輩とは、偶然どこかで出会う仲なのです、お礼を言わねば」

「ナカメ作戦」で会えた各場所で、逆に待ち伏せするちひろ。しかし何度待っても有一は通りすがらない。カレー屋の前、銭湯、中央食堂…。

京都の秋は深まってゆく。百万遍交差点では、学園祭の準備で運ばれる立て看板の、表側と裏側に偶然いるが、有一もちひろも気づかない。古本屋の本棚の表と裏に偶然いても、気づかない。有一の自転車がパンクして放置、自転車に気づいたちひろが夜まで待っていても、有一はバスでその後ろを通り過ぎて気づかない。

11月の学園祭。その最終日。実行委員長・葦沢は、次々に起こるトラブルに、本部テントで対応中。そこへ有一が顔を出す。「4日間もだんまりで、最終日になってようやく現れたか」「クリスマス前の最後のチャンスだと？ 見ろこの空騒ぎを。この祭りは青春の押し売り、否、青春の闇市だ。バカバカしい」「これは青春の祭りのすべてだよ」と後ろに貼られた地図を示す。そこに印をつけられた、二大トラブルの話をする葦沢。ひとつは、移動コタツでどこかに出沒、酒と鍋をふるまう「韋駄天コタツ」、もうひとつは突然はじまる5分ほどのゲリラ式移動演劇、つづきものの「偏屈王」だ。どちらも無許可なので、目下取り締まりを強化中である……

しかし有一は、話の途中でちひろの後姿を見つけ、パブロフの犬のように追い始める。「俺は、彼女の後姿なら、北大路から京都駅の距離でも見分けられる」「あきらめたのではなかったのか」「せめて彼女に再会して、運命だったかどうか確かめたい」だが有一は迷う。「…だが、なんと彼女に言う？ むんずと抱きしめて愛の言葉をささやく？ そんな、不自然な…」迷ううちに、彼女を見失ってしまった。

一方、ちひろは「おもしろき学園祭」をめぐる。アーチェリー部では巨大な緋鯉をゲットして背中に背負い、詭弁討論会ではパン連合ビスコ派に属し、映画サークル「み

そぎ」の上映会では涙を流し、お化け屋敷ではコンニャクにおともだちパンチを放つ。

ちひろはゲリラ演劇「偏屈王」に出会う。主演女優が実行委員会に逮捕されたため、主役「プリンセスダルマ」の代役を頼まれる。「なにかのご縁」と代役をひきうけるちひろ。

「偏屈王第 47 幕」。主人公、プリンセスダルマは思い人偏屈王に会うための旅を続けている。毎回、学園祭の時事ネタのサークルを敵に回したたかう。前は占い部、今回は映画サークル「みそぎ」。ラスト、天を仰いで「あなたに会いたい」というセリフで、思わずぼろぼろと泣いてしまうちひろ。「いい芝居だった」とほめられ、彼女は「実は、ずっと会えない人がいるんです。会いたい人の想像をただけで、どうして涙が」と。

一方、ちひろを探す有一。地面に畳をひきコタツに入り、酒と鍋を楽しむ「韋駄天コタツ」に出会う。その主は、樋口、羽貫とパンツ総番長。文学部と工学部の間に綱を渡し綱渡りする「冒険野郎」を酒の肴にしているのだ。再会を喜ぶ総番長と有一。「芝居は大評判で、客が増えている。最終幕、愛の告白まで、大河ドラマを書きまくる」総番長が次の脚本を書き終えると、コタツを次の場所へうつす一行。脚本を小さなダルマにたたんで入れ、その場所に置く。韋駄天コタツこそが、移動演劇「偏屈王」の拠点なのだ。互いに健闘を、と男二人は別れる。「恋は、汚い男を乙女にするのう」と樋口はつぶやく。

ちひろを探す有一は、号外新聞で「偏屈王」の新ヒロインがちひろに代わった事を知る。あわてて韋駄天コタツの場所に戻るも、すでにその形跡はない。「最終幕の愛の告白」を思い出す有一。有一は、「偏屈王」を追うことに決めた。

「偏屈王第 49 幕」上演中、葦沢と実行委員会が取り囲み、ちひろ達は逮捕されてしまう。「プリンセスダルマが偏屈王に会えなくなる」と、ちひろは脱走。スタッフや役者も脱走。逃げるちひろ、追う葦沢と実行委員会のチェイス。ちひろを目撃した有一は、追いかける側に加わる。

チェイスを目撃した、お化け屋敷のメンバー、詭弁論部、映画サークルなどが、次々に委員会を妨害しちひろを助ける。「芝居じゃねえからこれ！」と葦沢。学園祭中がプリンセスダルマの味方だ。「走れプリンセス！ 偏屈王の元へ！」

ちひろに助っ人が現れる。観客の女性、須田（20）だ。「私にも再会したい人がいるの。プリンセスは、偏屈王に再会すべき」と、ちひろの身代わりを申し出る。上着を取り換え、目立つ背中の緋鯉を背負う。二手に分かれる二人。

有一は緋鯉を背負う須田を（間違っ）追う。工学部の屋上でおいつくが、彼女は身代わりだった。「緋鯉より、後頭部を見るべきだった！」とくやしがる有一。屋上には先客がいた。韋駄天コタツの樋口と羽貫だ。向いの文学部の屋上こそ「偏屈王最終幕」の舞台、「風雲偏屈城」。韋駄天コタツは、ラストシーンにロケット花火を打ち上げる場所になっている。

だが、ちひろはこの最終幕の場所を知らされていないことが分る。

屋上から、あさつての方向に走っていくちひろを見つける有一。人ごみのどこだ、と皆は分からない。「たとえ月にいたとしても、俺は彼女の後頭部を見つける事が出来る！」花火を奪い火をつける有一。花火の弾道計算は、昔散々やった。一発の花火が、彼女のそばへ鳴きながら飛んでゆく。ちひろは気づき、振り返る。文学部屋上の風雲偏屈城を目撃、Uターン。

安心した有一は、屋上から足を踏み外し落ちる。だが、綱渡り「冒険野郎」のロープにひっかかり、一命は取り留める。事態に気づいたパンツ総番長に、有一は「偏屈王役を代わってくれないか！」と頼み込む。「あれは俺がやってはじめて意味がある！」「今のヒロイン役は、何故か俺の思い人なのだ！」「なんと！」「定刻までに君の思い人が観客席に現れなければ、偏屈王役を俺にやらせてくれないか。…偏屈王の鎧の中から現れるという、『運命の再会』はどうだろう！」 有一はロープを伝い、単騎「風雲偏屈城」へ。

三幕：

定刻。パンツ総番長の思い人（須田）は、観客席には現れなかった（※須田は、韋駄天コタツで芝居を見ている）。有一は偏屈王役に。「偏屈王の鎧は、合図で一気に外れ、パンツ一丁になる仕掛けになっている。『パンツ一丁で恋の誓いをした』がその合図だ」

芝居がはじまった。「偏屈王さま！ ついに会えました！」 偏屈王（鎧兜姿ゆえ、中身はまだ誰か分からない）の有一は緊張のあまり、セリフが全く飛んでしまう。ちひろが兜を脱がせると中身は有一。驚愕するちひろ。「き、……きぐうですね」 観客は台詞と思い大爆笑。有一はアドリブで続ける。「君の前では、自分を大きく見せようとして、鎧を大きくすることばかり考えていた。でもいざ君の前に立つと、自慢の鎧が役に立たず、ただのちんけな男になってしまう」 それを聞いたスタッフは、合図と解釈し鎧を外す。寒空の中、有一はパンツ一丁に。観客大爆笑。

「まさか、ここで君に再会できると思わなかった」「私も、こんな意外な再会が待っているとは」「ずっと、君に会おうとしてたんだ。木屋町でも、君を追い続けてた。古本市でも、君の後姿を探してた」「私こそ、偏屈王さまを探していたのです。あなたにひとめ再会し、私の心の宝物を取り戻してくれたお礼を言わねば、と、あなたを探し続けていたのです」「どれだけ追い続けたか」「どれだけ待ち続けたか」「…」「？」「へっくしょん！」 寒空にほぼ全裸の有一は派手なくしゃみ。観客またまた大爆笑。「…気持ち悪がられてもいいや。これ以上の恥はないだろう。好きです。一緒にいたいんです。顔を眺めていたいんです。」

きみの隣でにやにやしたいんです。君に会えないと、胸が痛いんです」「……」「?」「どうしましょう。私も、同じ気持ちのようなんです」

スタッフのカンペが間に合った。二人は芝居を続ける。「プリンセスダルマ！ もう離さない！」「もう離れませんとも！」 「抱き合う」のカンペを見て、有一は興奮して彼女を抱きしめる。「ゆこう！ 我等が理想郷、薔薇色のキャンパスライフへ！」 観客は拍手喝采。大団円である。

(向かいの屋上の) 樋口と羽貫は花火を上げ、余ったダルマを投げる。そのうちふたつが、パンツ総番長と須田の頭に同時に落ちる。彼らの「運命の出会い」と同じ形になり、互いの屋上の姿に気づく須田と総番長。

後夜祭のキャンプファイヤー。ちひろは有一に、ケータイ番号の交換を申し込む。「先輩は、神出鬼没すぎます。今度私の前に現れるときは、電話してからにしてください」キャンプファイヤーの炎が、有一とちひろの瞳を照らす。「…あの」「…はい?」「多分、次は古本屋にでも出沒するのだが、一緒にどうか。待ち合わせに最適な、…進々堂という喫茶店があるのだが」「…是非！」

エピローグ：

有一の部屋。ちひろの部屋。二人は夜になってもなかなか寝付けない。深夜、同時刻に外へ散歩に出かける。今までの舞台、木屋町の飲み屋街、下鴨神社、ナカメ作戦で会えた場所、京大時計台、偏屈王の舞台をそれぞれ一人で歩く。絶妙なタイミングですれ違い、二人は会う事はない。朝日が昇って来る。これまでの舞台がすべて美しい朝日に包まれてゆく。

有一 NA 「二人が同じ朝日を、奇跡的に偶然見たのを、こののち我々は知る事になる。俺は、これは人事を尽くした上での天命ではないかと言った。彼女は、なにかのご縁だと言った。いずれにせよ、論理的には確率的な事象を、ちがう言葉で言ったにすぎない。…ここまで来て理屈をこねてもしょうがない。つまり、運命は、ある」

喫茶「進々堂」。有一は、先に待っている。ちひろが絵本を持って入ってくる。ちひろは有一の隣の席に座る。照れて思わず笑う二人。

「八百万のイベントが、京都にはある。一緒に、歩きたい」「おともいたします！」